

福山市遺族会

福山市遺族会概況

〈沿革の概要〉

1、福山市内遺族は英霊顕彰、遺族処遇改善、遺族の地位の確保と世界平和の具現のため、同志の糾合により昭和二十二年四月に福山市遺族厚生会の創立総会を行った。初代会長に妹尾良温氏を推戴
昭和三十三年に福山城北登口に遺族会館を設立

爾来 松永市、沼隈郡、芦品郡、深安郡の福山市合併により会員数も八千有余名となり昭和二十七年に福山市遺族会と改称し、福山旧市内を中心に活動の輪をひろげ、遺族相互の団結をはかる

2、昭和四十七年中頃から既存の遺族会館が狭あい、環境事情等により昭和四十九年に本館を閉じ、福山市丸之内一丁目の現在地に、総工費約七、〇〇〇万円にて鉄筋コンクリート造り三階建て約六七五平方メートルの会館を建設、遺族の相互の親睦、団結を一段と強化した

三、昭和二十五年五月に婦人部を結成、遺族会諸行事に協力する

青年部は昭和三十五年末に結成をみ、諸行事の準備等に協力、県青年部に参加、研修会、キャンプファイヤー、交歓会、体育錬成会、靖国団参などの諸行事に参加

現在婦人部は一、一四五名 登録青壮年部員は七三五名

4、備後の各都市の親睦、交歓をはかるため四市七郡の各遺族会が結集

し、昭和三十三年に備後遺族連盟を結成、現在実りある活動を続けている。初代会長に倉田一夫氏を推戴

5、遺族援護の内容が複雑多様にある現在、援護内容の普及徹底をはかるため、福山市中央、東部、西部、南部、北部にそれぞれ遺族相談員を置き、援護全般にわたり会員の福祉向上に全力をあげている

また各支部に支部長、班長を置き、県新聞、日本遺族会新聞の配布は勿論、諸行事の通達に万全を期し、組織強化をはかっている

6、継続して実施している事業

(1) 靖国神社団体参拝

(2) 全国戦没者追悼式団体参拝

(3) 沖縄『ひろしまの塔』参拝

(4) 春秋二回備後護国神社において備後地域戦傷病没者慰霊祭

(5) 夏季『みたま祭り』

(6) 秋季福山市戦没者慰霊祭

(7) (5) (6) の場合は参列者遺族に慰問品を配布

7、青壮年部が継続して実施している事業

(1) 靖国神社または他県護国神社団体参拝、研修旅行

(2) 春秋二回の慰霊祭の準備(大テント、小テントの設営、撤去、

会場の整地、設置、整理等)

(3) 青壮年部相互の親睦をはかるため、年三回(総会を含む) 会合を開催

8、県が主催する都市会長会、理事会、婦人部会、青壮年部会、及び各研修会に積極的に参加

9、各地区(町)において戦没者慰霊祭を実施し、地区戦没者の霊を慰

める

春季に慰霊祭を実施している地区 十町

夏季に慰霊祭を実施している地区 三町

秋季に慰霊祭を実施している地区 十二町

10、主な役員

会長 竹田 浩二

副会長 外野 勉、高橋 隆美、高橋 利通

高田 光可、多田 義巳

篠原 弥之、門田 礼子、多田いづみ

婦人部長

青壮年部長 高田 光可

事務局長 田中 義夫

備後遺族連盟の歩み

福山が軍都となったのは明治四十一年（一九〇八）七月二十日、歩兵第四十一連隊が尾道から移駐してきたことに始まる。併せて連隊司令部、憲兵分隊、衛成病院（今の国立病院）などが設置され人口二万足らずの城下町であったのが俄かに活気づいて来た。

軍旗祭が、毎年三月二十七日に盛大に行なわれ、午前中の軍旗拝賀分列式があり午後は演芸、銃剣術、相撲などの行事があり、連隊と近郷住民との交流の場として盛況であった。

又備後招魂祭を四月の桜の咲くころ二日間にあたる祭典は慰霊祭のあと練兵場と営庭を開放して、大競馬、オートバイ競争、角力、銃剣術、

仮装行列などの余興があり、軽業、「のぞき」が小屋がけをし、露店が軒を並べて賑わい、農閑期でもあり、備後各地より数万の人数があり、春の楽しい行楽の一つであった。

戦後、昭和二十七年七月、福山市長藤井正男氏は、備後護国神社改築造営奉賛会を組織し自ら会長となって備後各郡市に呼びかけた。

・集り寄った者

福山市 広川憲一郎、尾道市 山形ハツ子、三原市 泰 正雄

深安郡 北村新之助、沼隈郡 和田 定一、御調郡 金野 完一

世羅郡 城 泰吉、比婆郡 岸 武、神石郡 村上濱次郎

甲奴郡 森光 寛一、双三郡 木島 次郎

この頃広島県会議長小谷伝一氏より護国神社一県一社の提案があったが備後地区の護持熱強く現状にて改築造営奉賛会設立され三千五百万円の募金が集まり事業は進められた。

昭和二十一年四月には深安郡川南村に北村新之助氏が遺族会を結成し郡を統一した。広島県に於いて遺族会結成の創始者である。

氏は村長に推され又県議に選出され、県遺族会の結成にも力をそそいでいる。昭和二十七年、県下各郡市の遺族会の結成も成り、県本部役員会に於いて、遺族援護について、本県出身の池田大蔵大臣に陳情し日本遺族会運動に支援し、護国神社復興奉賛について、本県二社を護持振興に努めることを決議している。同年八月三十日、県本部理事会を、甲奴郡上下町森光寛一氏宅に於いて開催し、講和条約発効記念県遺族大会国県合同慰霊祭を福山市に於いて開催することに決定。

備後地区遺族会は、福山を中心とし三市八郡、備後遺族連盟を結成して初代会長に福山市の会長、倉田一夫氏を任命、顧問として北村新之助

氏を推載し、十月二十二日三日と県大会慰霊祭が、福山市営競馬場で、かつての備後招魂祭にも勝る盛大なる行事を挙行。二日間にわたる慰安行事はすべて無料で野球、角力、柔道、万才、浪曲、自動車オートバイ競争、競馬、神楽、煙大と、町を揚げての盛況裡に行なわれた。

終戦後久しく戦没者遺族が精神的にも物質的にも公的処遇を廃止され、わが国の政治も経済も占領管理下におかれ、特に戦没者遺族の打撃は大きかった。十月十五日七年振りに天皇、皇后両陛下の靖国神社に参拝され、遺族もようやく明るみに向った感じの年であった。

備後護国神社の合併改築造営も進み、備後遺族会館も福山城裏丸之町に瓦葺二階建備後遺族会館の建築が完成、甲奴郡則永肇氏、第二代連盟会長に就任、事務局長世羅郡甲山町宗実訓二氏となる。

爾来、連盟会長は福山市遺族会長が兼任し事務局長も福山市より選任されて、運営されて来ている。

福山遺族会長中川弘氏の時、会館の移転新築の大事業をおこし、県会議員、福山市長を歴任した敏腕をもって、事に当り、県費補助、福山市補助、県本部補助金に各支部遺族の寄附金を願って、福山市駅前の大衆建設社長の献身的価格で鉄筋コンクリ三階、延坪六七五㎡の遺族会館を建設、福山市遺族会と備後遺族連盟の事務所として事務局長一名、主事一名、従業員二名、合計四名の常勤にて運営管理に当たっている。

主なる事業

- 1 備後遺族連盟役員会 歴代事務局長
- 2 福山市遺族会諸行事、事業 宗実 訓二
- 3 備後護国神社慰霊祭等の準備会合 湯川 延夫

春季慰霊祭 五月 山上 保
灯明祭 八月

- 4 靖国神社団体参拝 秋季慰霊祭
- 5 一般公開の利用事業 宿泊 合宿

会議場（会社各種団体）

研修行事会場 各種講習

講演会

役員 会 長 竹田 浩二、副会長 皿田 清人

事務局長 田中 義夫、主事 三村 光子

従業員 小林 静子、河野トシコ

平成七年度、備後護国神社秋季大祭が、福山市長の祭典委員長にて挙行され、広島県知事藤田雄山氏、神社庁長櫻井正弥氏郷土出身衆参両院議員、市町村長、議員等の来賓の参拝のもと終戦五十年記念の大祭が荘厳盛大に行なわれた。遺族代表で玉串を奉献しつつ終戦五十年の照る日曇る日遺族の辛酸を想い、招魂、慰霊の誠を捧げる今日の盛典の陰に英霊の顕彰、遺族援護に一生政治力を尽して下さった高橋等衆議院議員、永山忠則衆議院議員の功績に対し感謝の誠を捧げ更に歴代福山市長の、敗戦国にあり勝ちな『権力否定』の風潮にも負けず、英霊顕彰の先頭に立って活動激励戴き戦没者遺族に対する温かいお言葉は祭典を『尊厳と気品』を高め捲土重来の英気をもって、大東亜戦の真実を認識し英霊の心を心とする。平和国民運動に精進すべき責務を明るく力強く感得するものであります。

五十年半世紀の遺族連盟の歩みは英霊の顕彰靖国神社の国家護持未だ

備後地区戦没者
春季慰霊祭



みたま祭 (備後護国神社)



慰霊碑、本郷八幡神社の森
(福山市本郷町)

題字は内閣総理大臣 岸 信介氏

戦没者合祀の宮、合祀祭
 (福山市本郷八幡神社)



慰霊碑
 (福山市津之郷町)

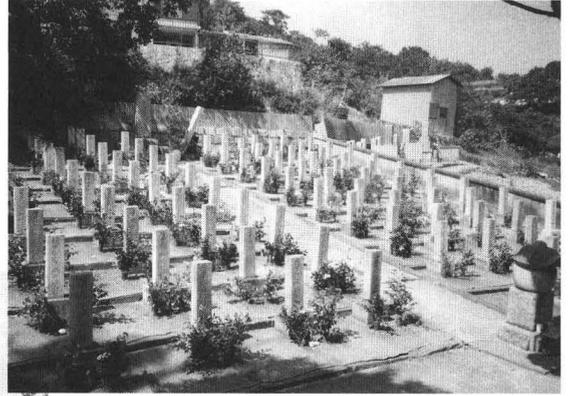


慰霊塔
 (福山市金江町)



慰霊祭
 (福山市箕島町遺族会)

橘神社に並び柳津護国神社



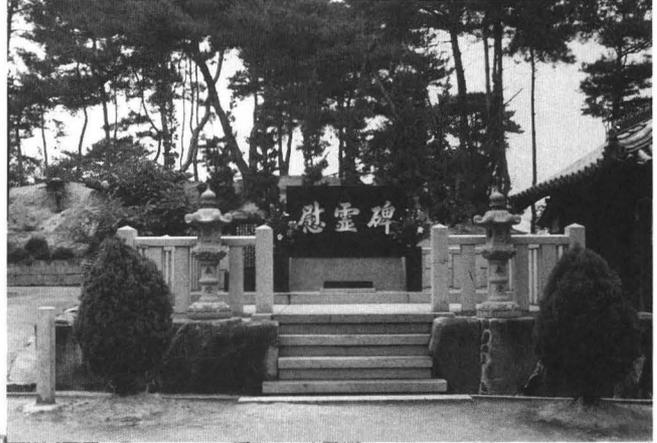
戦没者共同墓地
(福山市柳津町)
(全国でも珍しい施設)

慰霊碑
(神村町)



忠魂碑
(蔵王町)

慰靈碑
(引野町)



忠魂碑
(駅家町宜山)



戦没者表忠碑
(加茂町)



忠魂殿
(水呑町)



慰靈碑、忠魂碑
(春日町)



慰靈碑除幕式
平成元年三月三十一日
福山市藤江町遺族会



慰靈碑
(坪生町)



忠靈塔（東村町）



鞆護国神社（瀬戸町）

669柱奉斎（鞆護国神社奉賛会の主催で春秋年2回
執行）



忠魂碑

(瀬戸町福井八幡宮前)

160柱、太平洋戦争終結まで

明治39年9月山野村社八幡神社

日露戦争凱施記念、注蓮柱一対を村民一同で建
立す

題字は陸軍大将 福島安正氏筆

慰霊碑 (大門町)





春季第一回慰靈祭
前夜祭
(昭和25年4月14日)
於本庄神社彰勲殿前



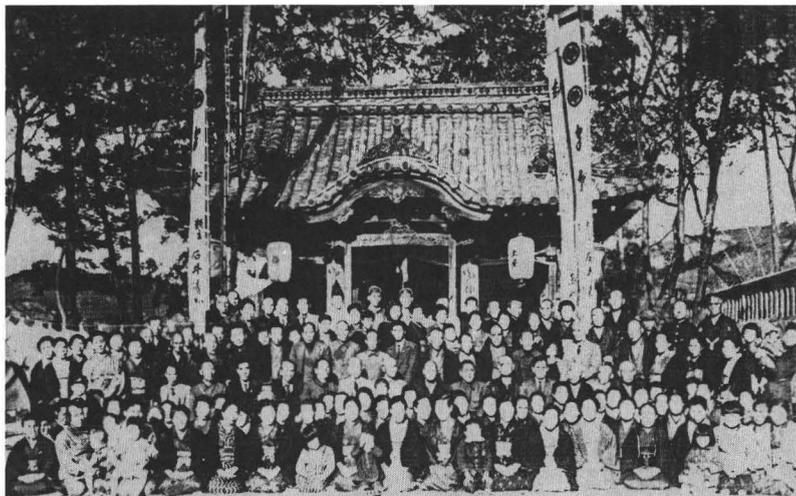
春季第一回慰靈祭
(昭和25年4月15日)



西町全遺族記念写真
(同年同月)

東町遺族会記念写真

(同年同月)

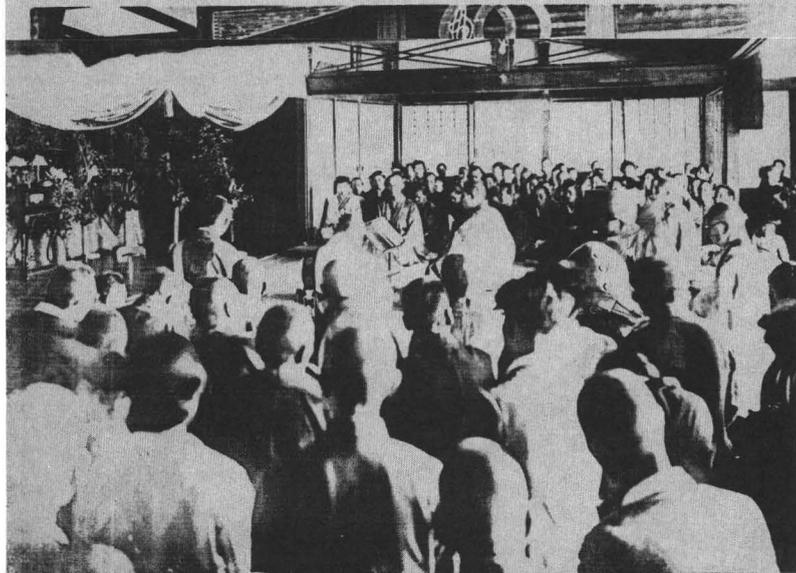


第一回秋季慰靈法要

(昭和24年9月)

於承天寺

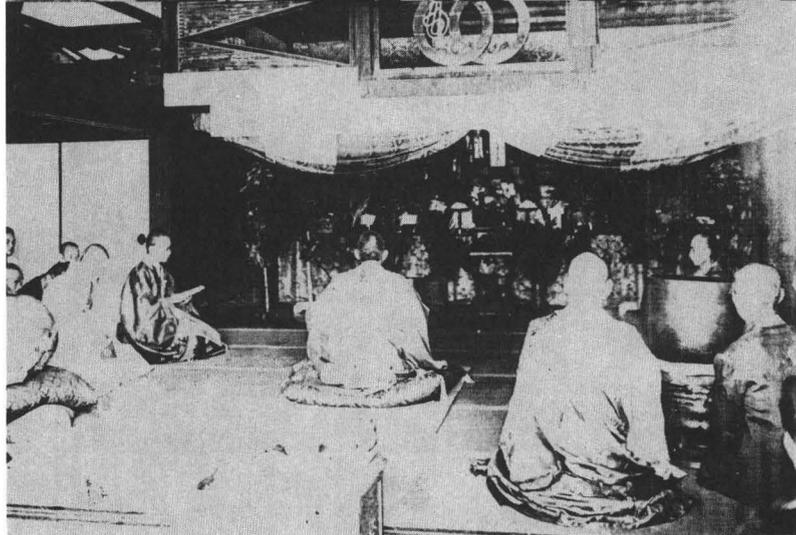
松永町遺族会発足記念写真



第一回秋季慰靈法要

(昭和24年9月)

於承天寺



成らず、東京裁判史観が政府の公式見解の如く本戦争を総理自からが侵略戦といひ反省と謝罪の意を表明するなど、開戦の詔勅の精神にも背き、二五〇万英霊の心を踏みにじるが如き暴挙に対し、我々遺族は満身の怒りをもって抗議し、大東亜戦争の真実を伝える国民運動を展開する責務を痛感するものであります。終戦五十年記念は之を節目として、昭和史の公正なる評価の上に立つての遺族運動を展開することを強く要望する次第であります。

備後護國神社御由緒沿革（昭55・10・1）

御鎮座地 広島県福山市丸之内一丁目九―二

御祭神及び由緒

■ 由 緒

当神社は左に掲げる「備後神社」と「阿部神社」を合併して昭和三十二年三月十一日新に「備後護國神社」として設立したものであります。

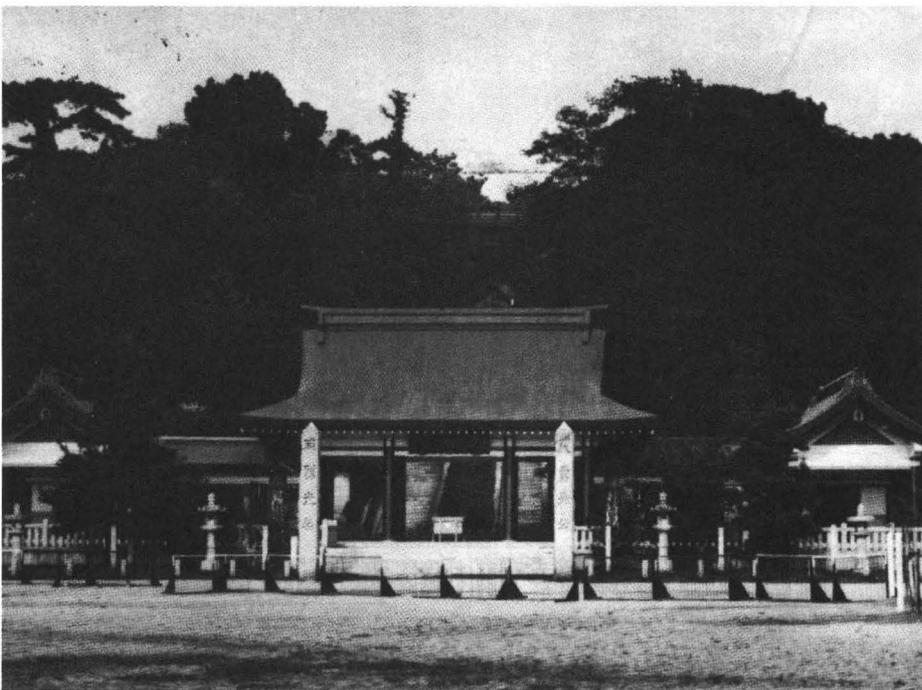
御祭神は國家公共につくして殉じられた備後六市八郡内の御英霊三一、四一五柱（昭和五十四年十月現在）と大彦命を主神とした阿部神社の御神霊とを併せて奉斎してあります。

尚、境内地及御社殿の大部分は阿部神社より無償譲渡されたものであります。

昭和三十四年七月一日には神社本庁より別表神社加列の指定を受けました。

■ 元備後神社

明治元年旧福山藩主阿部正桓公の創立で防長の役石見國益田の戦及び



全 景

渡島國（北海道）函館の戦に戦死した四十柱の英霊を祀ったのが始まりでその後佐賀、台湾、西南の役、日清、北清、日露、日独の戦、満州、上海、日華事変及び大東亜戦争に至るまで國家公共のため殉じられた御英霊をお祀りしてあります。

最初は深津郡木ノ庄村。吉津村入会之地（現福山八幡宮境内）に建立して「新宮」と称したものを明治二十六年七月福山公園地（現福山城跡）に移転し同三十四年七月「官祭福山招魂社」と改称し續いて昭和十四年三月招魂社制度が改正され広島県には特に二社を認定備後國三市八郡（福山市、尾道市、三原市、深安郡、沼隈郡、芦品郡、御調郡、世羅郡、甲奴郡、神石郡、比婆郡）を崇敬区域即ち祭神合祀範圍として内務省令により「福山護國神社」と改称して指定を受け引續き福山市沖野上町地先に芦田川廃川地二万坪を得て大規模の神域と荘嚴な社殿の完成を見んとした矢先空襲による戦災を受け昭和二十年八月八日石鳥居二基、神橋一基を残し一切を烏有に帰したのであります。戦後宗教法人令の施行に伴い占領軍の指示に従い「備後神社」と改称し、城跡にそのまゝ存置してあったものを「阿部神社」と合併し移転したものであります。

■元阿部神社

福山藩主阿部家の遠祖である人皇八代孝元天皇第一皇子高志道將軍、大彥命及び御子武沼河別命（同じく崇神天皇の御代四道將軍として東方十二國に差遣された方）と豊韓別命三柱の神を主神とし阿部家中興の祖従五位下伊豫守正勝公を始め代々の祖霊を奉斎したものであります。

建立は八代の藩主従四位下侍従備中守阿部正精公が文化九年七月久松城北にある小丘松山を開拓して工を起し旧領内の住民挙ってこれが工役

を援助し翌十年六月竣工したものであります。明治十年旧社名「勇鷹神社」を「阿部神社」と改称して県社に列格しました。

尚、現在「県立青年の家」の場所には「松山天神宮」が水野家の創建で造営され門前町として天神町がありました。が慶應四辰年砲台築造のため「浜の護穀社」へ移転されました。

忠魂碑

所在地 福山市加茂町北山（龍田神社境内）

建立 昭和十年十一月三日

深安郡広瀬村 広瀬村在郷軍人分会

祭祀 明治十年三月八日肥後国熊本にて戦死

佐々木管之助 外一〇三名

戦後荒廃状態であったが十数年前改装されて町内会、軍恩会並に遺族会により慰霊祭が行われて以後老人会の奉仕活動による清掃作業が年数



忠魂碑（加茂町北山 龍田神社境内）

回行われている。

社会情勢の変化に依り他地区に転出される遺族が多く現在では四十名である。

(加茂町北山 広瀬遺族会長 上元 正勝)

戦後五十年私の体験

福山市延広町五―二十五 島 田 ヒサ子

私の主人は昭和二十年三月休暇で帰り、十四日に海防艦に乗るため福山駅を出発し乗降口で士官服に白い手袋で敬礼したままの姿が見えなくなるまで立って下り列車で行ったのがこの世の最後の姿でした。八月十日終戦となり、私達の苦難の日が始まったのです。

敗戦に終るとは夢にも思っていなかっただけに、戦後のきびしさは入りました。

結婚以来留守がちの生活にはなれておりましたが、どうなるかと案じながら日々を送っておりました。八月末に知人より、主人の艦が八月十日にソ連の魚雷にやられているという事を知らせて下さいました。そして、もしや陸に上っているのではと思う心で毎日を待ち暮しておりました。しかしどこからも様子がありません。二十年十一月二十日に、日本海方面にて八月十日戦死したとの公報が入っただけでした。せめて主人の最後の様子でも知りたいと生存者をさがしました。艦のやられた様子だけわかり、二十二年八月遺骨の伝達がありました。

じっとしてはおられません。親子四人の生活を考えねばなりません。

商売をしたいと思って、素人で出来る商売をいろいろ考え、履物ならと思いつきましたが、家が住宅街のため店を出す事が出来ません。ちょうど近所の方が闇市に店を出しておられたので、その人のついで闇市に店を出す決心をしました。何も知らないで、仕入れから鼻緒を立てる事まで習い露店組合員の許可を取り、荷車の輪を鉄工所に頼み、車のはしごを大工さんに作っていただきました。大きな木箱五つに商品を入れて、店を出すための準備に約二カ月かかりました。初めて店を出したのが二十二年十二月二十日でした。お正月前に商品を早く仕入れていたのが売値が安かったためみるうちに売れました。五日目に仕入れに行くのと倍に近い卸値になっておりました。けれど出足がよかったのと商売のめづらしさで一生涯懸命に働きました。朝、商品を車に積んで家を出るまでが大変でした。子供を学校に出し次男を実家に預けて闇市に行けば、出るのが遅いため場所がなくなり、やっと間に入れていただく有様でした。子供達も学校から帰れば次男を家に連れて帰り留守番をさせました。夏の夜店の時は長女が夕食を作り、三人で食べて長男が私の弁当を運びました。夜遅く商売を済ませて帰れば、兄弟三人蚊帳もつらずに蚊に刺されながら寝ている姿を見ては主人さえ生きていて下さればこんな可愛相な事はないのにと幾度泣いた事でしょう。また雨の中を大きな車を引いて帰る時のつらい事このまま命が切れてくれたらと思っただ事度々でした。

昔のことわざに「憂き事のなおこの上につもれかし 限りある身の力ためさん」このことわざをよくくりかえしたものでした。子供は長男十二才、長女九才、次男三才でした。実家の父母も陰ながら子供の面倒を見てくれましたが、毎日のこととてつきつきりはできません。長男や長

女がよく協力してくれたため出店を続ける事が出来ました。二年続け二十四年に現在の所にお店を持つ事が出来ました。これも私の父が援助してくれたおかげです。お店を持って一番嬉しかったのは、商売に行かず家にて子供の面倒が見られる事でした。そのうちに落ちつきましたが、長女が、高校を出た三十年十一月に死亡しました。この時ばかりは自分も死にたいと何度思った事でしょう。後に残る子供達を思えばそれも出来ず、日々を暗い暗い気持ちで送っていました。親達が見かねて長男に嫁をとって五ヶ月目に嫁取りとなりました。次の年には孫が生まれ、やっと家庭に明るさが訪れました。時世が落ちついて履物も流行物に追われる様になりました。女手一つではなかなか追いつけません。長男の職を生かすため思い切って食堂にきりかえる事に決心致しました。これが三十六年七月です。お店の改造から器具の仕入資金に困りましたが、二年で借金も返しやっと軌道に乗りました。生活の安定した四十年に私の父もこの世を去りました。女手一つの生活を一番心配して、陰ながら随分援助をしてくれた父でした。四十一年に次男を大阪から呼び戻し、分家をして家を建て、嫁を一年後に取り次男の生活も安定しました。今では外孫二人、家に一人の計三人のお婆さんとなりました。私の役目もやっと果しました。それまでは夜となく昼となく一生懸命に働きました。苦しい時夢枕によく主人が帰って来た夢を見ました。最後に別れた時の姿で……。はっと覚めては、元氣を出させるために姿を見せたのだなあ、と思いを变えて商売に励みました。昭和二十五年、福山市より母子家庭として表彰していただきました。ちょうどその日に遺族会婦人部が結成されました。その時以来役員を務めさせていただき遺族の皆様との会合をただ一つの楽しみとしておりました。昭和四十七年、八十二号海防艦

の生存者の手で呉海軍墓地に慰霊碑を建てていただきました。そして同年八月十日に除幕式があり、二百五十名乗組員の内百五十二名の戦死者の中に主人も入っておりました。宴会の終りに、「砲術長の奥様、ちょっと来てください」と言われました。私が行きますと、六名の方がおられ次々と紹介があり、「自分達は一緒にいた生き残りの者です」と言われ艦の最後の様子や主人の事を次のように話されました。主人が見張に立ち指揮をしていて、ソ連の魚雷を六発までかわし七発目の時主人が命令した反対の舵を取られ魚雷が落ちて来る海面をじっと見つめていて当たる寸前「艦長、魚雷が当ります。」と言った瞬間、手を胸に当てショックで倒れた。と、そばにいて主人の命令を伝えていた部下の方から言われました。主人はそのまま艦と共に沈んで行ったとの事でした。残った方達は約二時間海の上を泳いで助けられたそうです。この最後の様子を聞いたのが二十八年も経つての事です。あきらめてはおりましたが、やっとその時、軍人として立派な最後であった事を知り、私達も主人に負けない様に人様に笑われたい生活をしようと子供達に話し、自分も心に誓いました。五十年七月十四日、婦人部会員百二名で、みたま祭に参拝いたしました。午後と晩の式典に参列させていただきました。あの荘厳なお祭りが国の手で行っていただけなのだったらと思いました。主人が口癖に死んだら靖国神社と言っていた言葉を参拝の度に思い出します。遺族の念願である靖国神社国家護持が今だに実現しないのがただ一つ残念です。国のため一家を犠牲にした人達の霊を国でお祀りするのを反対する人達の言葉では、戦争につながるとかいろいろ口実をつくられますが、私達遺族の気持ちをもっと理解してほしいと思います。あの悲惨な戦争で愛する夫を失った未亡人の方々の過去五十年間の思い出、戦争の犠牲に

なることは私達だけで結構です。平和の尊さ重さを一番身にしみて感じております。遺族の方達で戦争を望む人は一人もいないとはっきり言えます。呉の海軍墓地合同慰霊祭は秋の秋分の日に行われます。近くの生存者の方も必ず参拝して下さいますが、当時十七、八才の方々も、もう七十才近くなられお会いする度に一緒に昼食をして二時間ぐらいい話した事もありました。戦争のショックは終生忘れられない思い出であり、二度としたくないと言って私達の苦労話に耳を傾けてくださいます。主人の戦死した時の話してもよく聞きました。戦友の霊墓へは自分達が生きておる限りお参りするとも言ってくれました。今までの苦しかった事、悲しかった事、また嬉しかった事など思い出は尽きません。生きていてよかったと日々仏壇に手を合わせ、今の幸を主人に一目見せたいと思います。仏の供養のためと御詠歌を習い、会員のグループもでき、月一回の稽古が楽しみです。残る余生を少しでも明るく暮し、今までお世話になった方々へ感謝して御恩返しのできる気持ちを忘れず、仏の供養をしながら日暮しをしたいと思っております。

最後に靖国神社国家護持の実現を念じつつペンを置きます。

戦後五十年私の体験

福山市奈良津町一―二六一―一六 山口 諭子

昭和十六年九月二十六日午後八時主人に召集令状！ 当時の日本男子としては、軍人になることは当然の事とは申せ、余りにも早く召集されました。二十七日一日だけの猶予で二十八日には広島比治山連隊に入隊

せよ。神詣でもするな、近所にも挨拶するな、奉公袋は勿論、風呂敷包で来いと、きびしい指示で、本当にこっそりと出征致しました。留守家族は五才の長男と三才の長女と私三人だけでした。子供の成長を楽しみに、必死に銃後を守りました。そのうちに主人達の部隊は南方の島に渡っている事を聞きました。昭和十六年十二月八日、大東亜戦争が勃発しました。日増しに戦争は激しくなり、時々B29も本土を襲うようになり明け暮れ警戒警報、空襲警報のサイレンに悩まされました。私も銃後を守って懸命に働きました。長男は小学校へ、長女は私と一緒に授産場へ、授産場の中に保育所があってお世話になりました。授産場の仕事は軍需品縫製（袴下・垂布）です。戦地の兵隊さんが直接身につけて働いて下さるのだと思えば自然一生懸命縫製致しました。「戦争に勝つまでは」と、子供達と一緒に、毎日毎日、神仏の御加護を祈り続けました。その間も比較的軍事郵便がよく届きました。「健康で奉公している、子供をよろしく頼む。」と、いつも簡単な便りでした。昭和二十年を迎えてからは、全然便りがありませんでした。そのうちに空襲は激しくなり、あちらこちらの都市が空襲を受けました。思い出してもぞっとする恐ろしい原子爆弾が、昭和二十年八月六日、広島市に投下され、広島市は一瞬にして灰となりたくさんの犠牲者が出ました。それから八月八日午後九時三十五分には、福山市が焼夷弾の一斉攻撃を受け、閃光一瞬、轟音と共に数十機のB29より焼夷弾が落されそのすさまじさは筆舌では言い表わす事は出来ませんでした。泣き叫ぶ二児の手をひいて川辺に避難しました。おかげさまで家は焼けずに残りました。焼け出された叔母一家が家に同居する事になりました。八月十五日は一生忘れる事の出来ない終戦記念日となりました。勝つまでは勝つまではと信じていたのに

敗戦となり、食糧危機は益々激しくなりました。主人の生死もわからな
いまま、私達親子は、笠岡市の実家に、暫くお世話になる事になりまし
た。子供も馴れない田舎の小学校に転校致しました。私も農業の手伝い
に明け暮れ、雨の日には慣れない草履作り縄緬いなどあらゆる手伝いを
いたしました。一年が過ぎても主人の生死はわかりません。また、福山
に帰りました。そうして昭和二十一年十月より、池田糖化KKに勤めま
した。肉体労働のためか、思いがけない神経痛を患いながらも仕事を休
みまずと生計にひびくので、治療を受けながらの出勤でした。お医者さ
んの申されるには、このまま仕事を続ければ両手は動かなくなるぞと申
され、困っておりましたところへ、郵便局で一名募集をしているとのこ
とで、知人の紹介があつて早速応募しました。幸いにすぐ採用され、昭
和二十三年十月より勤務がはじまりました。保険課の外勤で、赤い自転
車に乗って、市内市外と駆け廻って集金や募集をして、成績を挙げるの
でした。勤めにもようやく慣れた頃、主人の部隊の生き残った一人の福
岡市の方より、自分は負傷のため病院で終戦を迎え、その後部隊の消息
を一生懸命しらべたけれども、全員見当らないので戦死されたと思いま
すので、戦死の公報や遺骨の請求をして下さいとのお手紙をいただきました。
手続きをしました。そして遺骨も形ばかりのものをいただきました。昭
和二十年三月二十日に戦死という事になっております。子供達も覚悟は
していたものの、あまりにも気の抜けたような、あっけない処理のみじ
めさに少し不服でした。

それからは前以上に協力一致いたしましたして親子ともども助け合い励ま
し合つて頑張りました。長男も昭和三十五年に結婚し、長女も昭和三十
六年に結婚し、共に二人ずつの子宝に恵まれ、私を安心させてくれまし

た。申し遅れましたが、私も昭和四十四年六月一日付で退職させていた
だき、今では四人の孫もそれぞれ独立し、三人の曾孫にも恵まれ、曾孫
を相手に大変幸せな日々を送って老後を思いのままに生活させて貰つて
おります。「禍福は糾う縄の如し」とか、諺の通りだと信じて居ります。
最後に臨み、いついつまでも平和が続き、戦争を絶対に行ないよう切
望してやみません。

いま　ここまで生きてきて

福山市西深津町二―一三―三―四　外　林　妙　子

若くして夫を亡い、さまざまな障碍をのりこえながら「よくぞここま
でやってきた」と今はもう老年期に入っている戦争未亡人たちの感慨は、
だれもみなこの一語に尽きるのではなからうかと考えます。何故ならば
私もその一人なのですから。

お誕生まえのとても可愛くかけつけた長女をおいて、夫はお召しを受
けました。三ヶ月の教育召集でした。幸い在勤地の隊に入隊しましたの
で毎週の面会日には、子どもをおんぶし、ねんねこの下には乏しいなか
を工面した、いくばくかの心づくしの品をしのばせて隊の門をくぐった
ものでした。

教育期間が過ぎても一向に除隊になる気配はありませんでした。そし
て九月終りだというのに夏の装備で勇ましく出征して行つたのです。夫
の入隊中にやつとどうやら歩けるようになった長女は、父に抱っこされ
て暫く過したのが最後でありました。夫は「子供を頼む」とだけいいお

いて出て行きました。

私はまだ若く元気でありました。何年経っても、帰って来る夫をこの家で迎えようと、郷里へは帰らず、子供を連れて残る決心をしていました。子供を負って防空演習にも参加しましたし、床の下に何日もかかって防空壕も堀りました。まさかと思っていた本土空襲も、次第に回を重ねて襲って来るように厳しい状況になりつつありました。そうするうちにとうとう郷里へ引き揚げねばならなくなりました。これ以上小倉にいても仕方がなかったのです。それはほんとうに悲しい事実として夫が戦死したとの内報があったからでした。昭和十七年、私は昔流にいう数え年でまだ二十二才の時でした。子供を連れて福山の祖父母の許に帰って来ました。祖父母が防波堤になって下さって、世の荒浪を直接かぶることは少のうございましたが、まだ未婚でいる友人達もたくさんいました。頃ですから子連れの未亡人としての若い自分が、いかにもみじめに思える日々でございました。

その後私は子供の手が離れるようになりまずと同時に勤め始めました。幸せなことに、祖母が永らく達者でいてくださったおかげですと勤めに出ることができました。

過ぎし五十年を語るとなりますれば、勿論いろいろの事がありましたけれど現在ではタイムトンネルの出入口入口のことしか覚えておりませず、中間での苦しかった事は忘れてしまったようです。それだけ私は、勤務先にも、人にも、環境にも、ほんとに恵まれていた方なのかも知れません。戦後昭和二十九年だったと思いますが博多で戦没者の慰霊祭が行われた時、生き残りの方々や関係の方々から耳にしたことですが、やはり夫たちは南方に送られ、しかもあの激戦だったといわれる、ガダル

カナル島に向っていたとのことでした。幸か不幸か、夫はその戦地まで行く前に、ラバウルで戦病死したとのことですが、詳しいことは何もわかりませんでした。でも私はこれ以上に詳しいことを知りたいとは思いませんでした。多くの戦死者の方々の、あの耳を覆いたいような悲惨な状況をつぶさにはきかされなくなかったし、ききたくもないからでした。私は夫の戦病死していった実情を聴くことに耐えられなかったからでした。出来得れば何とかしてラバウルへ、夫の亡くなったというラバウルへ是非行きたいと念願しておりました。その願もかなえられ二度ラバウルへ行ける事が出来、夫の霊を慰められた事が出来、肩の荷が落ちた感じがいたしました。

又唯一非常に嬉しかった事は、夫への約束を果たすことができました、娘が無事学業を終え就職もできた時でした。娘の将来の万一を考慮して、娘には自活出来るだけのものを身につけてやらたく、それこそ私は、すべてのものを犠牲にしてもと、悲惨な覚悟で学校へ入れましたが、真面目な娘に成長してくれました。そして卒業式に望んだ時は、重い重い肩の荷を下したようで、心のうちで「貴方みてやって下さい。こんな立派な娘になりましたよ。」と誇らしげに報告すると共に、思わず他人さまにはわからない感無量の涙にむせんだのでした。

その娘も今では既に二児の母となりました。そして長い間留守番ばかりさせた祖母にもお別れしまして、今やとどうやら私のつとめも終りに近づき、ここまでよく来たものだという実感に浸っています。

家の重みと、生活のために一途に生きてきた五十年でした。何もよいしないでただただ一途に生きることのみだった五十年を振り返ってみまして言える事は「もう決して戦争だけは……」と、はっきり声を大にし

て叫びたい気持ちです。

今は亡き主人を偲んで五十年

福山市遺族会婦人部副部長 多田 いづみ

光陰矢の如しと申しますが月日の流れは早いもので私は学校の推せん
で大阪の郵便局へ勤務する事になり五年半一度も休む事なく故郷へも帰
らず勤めました。奥様に大そう気に入られ奥様の従弟に当る人が復員さ
れ早速見合し結婚してくれないかと申し入れがあり嫁入支度は全部し
上げるからとの事で再三父に手紙を出し遂に、了承を得ました。

昭和十五年十一月三日大江神社で式を上げ、披露宴を催して頂き家も
玉出の石井さん宅を借りて下さり、結婚支度はタンス、下駄箱等、亦、
炊事道具一式に至るまで準備してありました。親でもそこまでは出来ま
せんのに毎日感謝の気持一杯で新婚生活を過して居りました処、あれは
丁度結婚して十ヶ月過ぎた七月二十六日に電報により十六年八月一日善
通寺へ入隊の召集令状参りました。

私は身重の体で父が迎えに大阪まで来てくれました。奥さんの計いで
堺の丸三という料理屋で送別会をして下さり田舎へ疎開しました。『教
育召集だから六ヶ月したら帰る』との言葉を残し出征。善通寺へ入隊。
一度満州へ行き比島へ渡りました。大阪の警察へ主人は勤務していた関
係でルソン島のイロイロ憲兵隊やセブ憲兵隊に勤務しました。昭和十六
年十一月二十一日女の子を出産。戦地から女の子なら満寿子男の子なら
誠と名づけなさいとの事でした。私が洋髪で式を上げたので子供の四ツ

身の時丸まげ姿で写真をとり送りましたら毎日ポケットから出しては見
ていると喜んで手紙をよこし、三月一日葉書で『そちらはいくらたまり
ましたか、こちらは五百円たまりました』便りがずつとどきました。
私はいつもお寺参りをしたら神様へ願がけ致しましたが、その甲斐もな
く昭和二十二年七月二十四日付で公報が来ましたと役場より広本助役さ
んと河上議長さんが届けて下さいました。今にして思っておせば二十二
年三月に内報があったのではないかと思います。『主人が帰られるまで
役場へ出て見ませんか』三月三十日に役場へ来て下さいと呼出があり伺
いましたら四月一日より勤務する様申され、主人は帰らないけど今日か
明日かと帰りのみ子供と実家で待って、私は勤務の傍四月三十日の広島
県会議員の選挙に相方村長さんが立候補され応援演説に芦品郡内を走り
廻りました。府中中学校で立会演説があり芦田総理が相方候補の応援に
来られ『僕の名前に等しい芦田川の護岸を必ず立派にする』と約束して
帰られ今は府中から福山までほんとにきれいになりました。それから三
十五年公務員生活を送り昭和五十七年三月末日付で退職し今は共済年金
と主人の遺族年金で何不自由のない生活を送り孫も三人出来ずでに女の
孫二人は結婚し、ひ孫が四人も生まれ楽しく人の御世話をしながら余生
を過し、来年は主人の五十回忌を元気で迎えるべく家族四人で心支度を
し、百働会副支部長、駅家遺族会長、福山遺族会副会長等々多忙な毎日
を希望にみち感謝の気持一杯で暮す今日この頃でございますが、一寸体
調が悪い時いつも心の片すみで主人が居てくれたらと思いつつ一年でも
長くお墓のもりをしながら過そうと思っております。

戦後五〇年をふり返って

石井正枝

戦後五〇年は、過ぎてみるとあっという間の歳月でした。軍国の花嫁（戦争中）として昭和十七年八月満州に渡り、新京、ハイラル、免渡河を部隊と共に移動し、十九年十月に部隊が南方戦線に出動致しましたので、残された家族は十二月下旬内地に帰りました。空襲を受け、終戦を迎え、そして昭和二十二年三月でしたか戦死の公報に接しました。

子供一人抱え、これからの生活を深刻に考えねばならない境地に立たされました。混とんとした世の中で何をしたらよいか、いろいろと迷った揚句に洋裁で身を立てようと考えました。子供を母に預けて洋裁学校に入学致しました。生活がかかっているのに若い人に交って一生懸命勉強しました。二年かかってやっと一通り身につけ、新しい道を歩こうとした矢先きに、子供が不慮の死を遂げました。

悲しみに沈んでいる時に、勤めをしてみてもと相談を受けました。折角洋裁を身につけたのを棒に振ってと随分迷いました。再三の申し出に、父も皆様の好意をお受けしてはと申しますので、やっと決心致し勤めを初めました。じ来二十九年間、両親に見守られてひたすら自分の務を大切に仕事に専念致しました。すべての面でよき同僚に恵まれ有意義な日々を過ごすことが出来ました。お勤めしてよかったと喜んでおります。

退職後は、主人の属していた部隊の生存者（五五八会を作っておられる）の方々の好意で、戦死いたしましたフイリピンへ巡拝の旅を数回、そして満州で生活した場所へも二回連れて行っていただきました。それ

に毎年フイリピンで戦死した方々の慰霊祭を鹿児島県広国保護課が、開聞町花瀬海岸に慰霊碑を建立してそこで三月二十七日に行つて下さっております。

又五月八日には五五八会（生存者でつくる）の主催で鹿児島県護国神社で慰霊祭をしていただいております。この会に参加する度に、戦友の方々から丁寧なおもてなしを受け、自分の幸せをかみしめ有難さで胸がいっぱいになります。

主人もよき戦友の方々との生死を共に出来てフイリピンカバルアン丘で散華したことを思います。主人との生活はわずか三年余りでしたが、戦後五十年大ぜいの皆様から、暖かく見守られて幸せな日々を送らせていただき感謝しております。

残り少ない人生を健康に留意して皆様のお役に立つよう頑張りたいと願っております。

記念誌発刊に寄せて

松永町担当 岡本禮太

小生は昭和十一年生れの五十七才。昭和十六年親父が応召、同二十年戦死。時は巡って昨年から遺族会長に任じられて一年半……漸つとおぼろげながら分り始めて来た今日この頃である。

二次大戦後約半世紀が過ぎて世界一の経済大国にまでなった我が国の一般の人々にとって今や遠い昔の物語りでしかない。しかしこの任に就いてみると既に高齢化した遺族の方々もヒザを交えて話してみると丸で

昨日の如くに悲しみを忘れておられない数多くの姿に接すると自分も又堪られなく感銘を覚える。

「日本遺族会」……正会員が近年急減しているとは言え準会員青(壮)年部を加えれば実に大きな組織だ。政治家も利用したくもなろう大きな票田である。併亡追悼、慰霊と言う共通の同根の心を持った本来は結束力の強い団体である筈だ。

基本的には国策の戦争犠牲者の組織であるから当然国に対して賠償責任を問うこととなる。政治家とはこの点に於いて持ちつ持たれつの関係が永年続いて来たと思う。

まだまだ勉強不足で良くは分らないが、恩給や年金受給者が急減している中でその金額が学卒の初任給にはるかに及ばないと知っていささか驚いている。併も正会員が亡くなった途端に年三万円の香料しか出ないとは……。戦争の傷口は親・子・孫三代に及ぶ事を考えると何とひ弱な団体だろうと思う。

中央の幹部・役員は種々恐らく努力はされたのだと思うが、永年かかった成果は惨たんたるを自覚されているのか？真正面から答えてもらいたい。

長谷川峻氏が亡くなられて橋本龍太郎氏が日本遺族会の会長を引き受けられた途端に皮肉にも自民党は野党に転落した。更に組織の若返りを目指して平成7年度を目途に青壮年部へバトンタッチするとの方針が出されたが、既に吾々とてももうオジイさんだ。十年遅きに失った感がする。(この一年半その事はイヤと言う程に味わされた。)

追悼・慰霊を永遠に……と言うのであれば今孫に当る層を組織化すべきと考える。そうすれば吾々(青壮年部)も次世代への語り人としての

役割を果せるであろう。

今二十代の若者達は純白の心でその抛り所を求めている。(新興宗教へとびつくのもその証しだ。)

先祖に対して敬虔な気持を持つ若者が年々増えつつある事は墓参をしてみると良く分る。墓掃除や献花も若い人達が良くやっている。

この辺で遺族会も早く頭を切り替えないといけない。

我々の会の第一義は追悼・慰霊である事を忘れてはならない。靖国神社公式参拝とか北方領土とか、日の丸とか、君が代；等は遺族会が声を荒げて言う必要はないのではないか。

多くの御霊に対してすがすがしくありたいと思うのは私一人ではないと思う。

「遺族会は、何処へ行くのか？」